

研究課題	思考し自らの課題を解決する「文字学習」から掘り起こす国語の力
副題	文字の指導 [知識・技能] の領域に、ICT をいかに活用していくべきか
キーワード	国語科 文字学習 知識・技能 ICT の活用 ホシオキスタイル
学校/団体名	公立札幌市立星置東小学校
所在地	〒006-0852 北海道札幌市手稲区星置2条1丁目6-1
ホームページ	<a href="https://www.hoshiokihigashi-e.sapporo-c.ed.jp">https://www.hoshiokihigashi-e.sapporo-c.ed.jp</a>

## 1. 研究の背景

本校では、開校以来「豊かな心で学び続ける子どもの育成」を研究主題に掲げている。「豊かな心」とは、子どもが生活の中で様々な事柄に興味、関心をもつ心、他者との対話を通して互いの考えを受け入れ、認め合い、尊重し合う心のことである。心はあらゆる行動の原動力になる。「学び」とは、新たな知識の獲得や思考することによって自身の変容することである。そして、学び続けるとは、自身の変容（学び）を続けていく、学びを積み重ねていくということである。本校ではこのような子どもの育成を目指してきた。

本校の子どものよさは、児童アンケートの結果から、**自己肯定感が高いこと**、学習に対して前向きに取り組むことができる**知的好奇心が旺盛であること**、そして、**友達と共に活動することを楽しいと感じていることが挙げられる**。また、3年前から始まった「GIGA スクール構想」において一人一台端末が導入され、様々な学習場面で使用することが多くなった。子どもたちは学習場面における**タブレット端末の活用を「楽しい」と感じたり、分からないことをすぐに調べることができることに「便利さ」を感じたりする**など、使用法に慣れ、抵抗なく使用できるようになってきた。

一方で、毎年4月に実施している標準学力検査教研式NRTの国語の結果を見ると、知識・技能に関する問題の正答率が思考・判断・表現に関する問題の正答率と比べて低い傾向にあった。そこで、本校では、文字学習におけるICTの活用に着眼し、その効果的な活用方法や具体的な手だてを探る実践を通して、国語科の知識・技能を高めることを目的とし、研究を行った。

## 2. 研究の目的

従来の文字学習では、ドリル等を使用して新出漢字の反復練習を行ったり、学んだ漢字を使って文章を書いたりするなど、漢字や言葉を覚えるための学習が多かった。しかし、そのような学習を積み重ねても、子どもが文字や言葉に対して興味、関心を高めて活動する姿を引き出すことは難しい。そこで、教師主導になりがちな文字指導の領域にICTを効果的に活用し、「思考する文字の学習」を実現することで、国語科の学力、資質・能力を育成していきたいと考えた。

さらに、国語科の文字学習に特化した研究を行い、子どもが①言葉への興味を高める②活用できる語彙を増加させていく③言葉の豊かさに目を向けていく、以上①～③を目指した学習を構築することを研究の目的とした。併せて、本校が目指す文字学習の指導力を教師が身に付けることも目指していきたいと考えた。

3. 研究の経過

実施日	実施内容	評価・備考	
令和4年度	6月	研究全体会① 研究主題と副主題、研究体制	教職員全体で研究の方向性を共有
		保護者・児童アンケート 文字や言葉に関するご家庭でのお子さんの様子について	アンケート集計（保護者・児童）
	11月	全校研究授業【実践】 3年 漢字の筆づかい「曲がり」（書写） 4年 漢字の広場（漢字）	記録・動画撮影（児童） ループリック（児童） 授業検討（教師）
	1月	学校評価全体会	アンケート集計（教師）
		保護者・児童アンケート 文字や言葉に関するご家庭でのお子さんの様子について	アンケート集計（保護者・児童）
	2月	研究全体会② 今年度の成果と課題	実践報告書（教師）
3月	研究全体会③ 新年度の研究について		
令和5年度	4月	NRT 学力テスト（2～6年）	結果集計・考察（児童）
	5月	保護者・児童アンケート 文字や言葉に関するご家庭でのお子さんの様子について	アンケート集計（保護者・児童）
	6月	研究全体会【実践】 モデル授業 6年 楽しみは（語彙） 今年度の研究推進	記録写真（児童） 授業検討（教師）
	10月	事前検討会	
	11月	第9回 教育実践発表会【実践】	アンケート（参会者）
	1月	保護者・児童アンケート 文字や言葉に関するご家庭でのお子さんの様子について	アンケート集計（保護者・児童）
	2月	研究全体会【実践】 モデル授業 4年 理科 2か年研究の成果と課題 文字と言葉のアンケート	実践報告書（教師） ループリック（児童） アンケート集計
	3月	研究全体会 新年度の研究推進について	

表1 研究実践内容

4. 代表的な実践

(1) ホシオキスタイル

本校の研究では、知識・技能を主体的に獲得する子どもを育てるために「ホシオキスタイル」を考えた。「ホシオキスタイル」は、【学びのマップ】【教材データの蓄積】【ICTを活用した授業作り】【アンケートを活用した実態把握と更なる改善】【ルーブリックを活用した授業の見直し】の5つに重点を置き、2年間かけて、実践を積み重ねてきた。本校らしい指導法や学習スタイルを構築することは、本校の教職員が共通の意識をもって6年間子どもを育てることにつながり、子どもも安心して学び続けることができると考える。

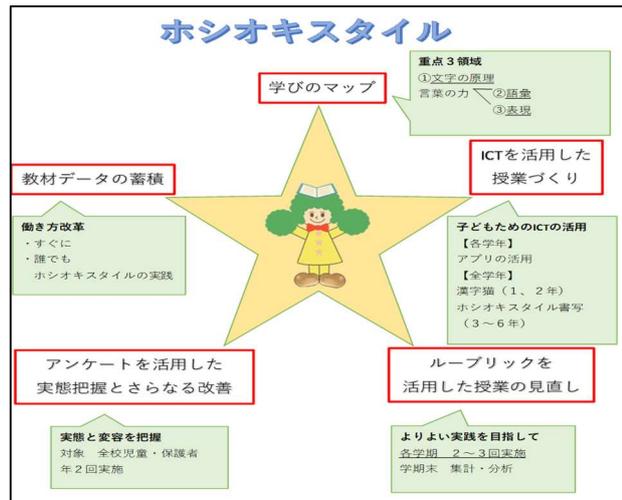


図 1

(2) 全単元を貫く「毛筆学習ホシオキスタイル」の学習展開

本校では、3年生以上の書写(毛筆)の学習における「ホシオキスタイル」を考えた。これは、筆使いや文字のバランスなどを意識して毛筆学習を行うことで、硬筆においても学びを生かし日常における文字を書く活動へとつなげることを目的としたものである。児童の机に、[天板拡張くん【TFW-DE60/TFW-DE65】 - TFabWorks \(ティーファブワークス\)](#) を使用し、タブレット端末を置くスペースを確保したことで、手本動画を必要に応じて視聴しながら毛筆の練習を可能にした。



図 2



図 3

- ①本時の教材文字を硬筆で書き、課題を見付ける。  
(バランスが悪い、画が長すぎる、など)
- ②手本の教材文字を、手本を見ずに毛筆で書く。
- ③手本と見比べ、整った字形に近付けるための学習のめあてを立てる。
- ④毛筆で自分の運筆を矯正しながら、学習のめあてを達成するために課題解決を図る。  
(Google ドライブの活用)
- ⑤整った字形を書くためのコツを交流し、課題解決のポイントを焦点化する。
- ⑥本時の教材文字を再度硬筆で書く。
- ⑦本時の学びが生かされる別の文字を硬筆で書く。
- ⑧学びを振り返る。

(3) 第9回教育実践発表会

3領域4部会で7つの授業実践を行った。

領域	学年	目指すべき子どもの姿
文字の原理	1・4年 ほほえみ	文字の原理、原則（筆使いや字形など）を理解する。平仮名、片仮名、漢字、ローマ字などを、正しく書くことができる。
語彙	2・6年	語彙を量と質の両面から充実させる。語彙を豊かにする。意味を理解している語句、話や文章の中で使いこなせる語句を増やす。
表現	3・5年	表現の仕方を学ぶ。自分の考えが伝わるように、表現を工夫する。

表2



図4

5. 研究の成果

(1) 児童の言葉に対する興味や関心の高まり

研究の成果を見取るために、文字や言葉のアンケートを全児童に実施した。

設問1【国語や書写の時間にタブレット端末を使うことで、次のようなことはありましたか?】というICTの活用についてのアンケートでは、肯定的な回答（Aとてもそう思う、Bやや思う）の割合は、全ての設間で70%を越える結果となった。【自分の考えをクラス全体に伝えやすい】【自分なりの考えやアイデアを出しやすい】【自分の考えていたことを振り返ることができる】、3つの項目では80%以上の肯定的な回答となった。子どもは、自分の考えをもったり、友達と共有したり、自分の考えを振り返ったりする場面において、ICTの活用が有効だと感じていることが分かった。

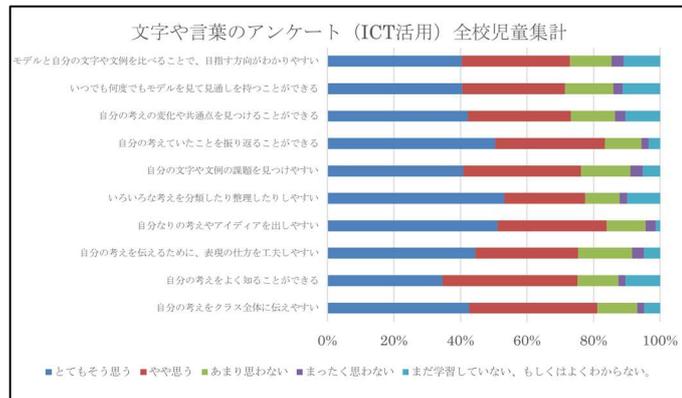


図5

子どもは、自分の考えをもったり、友達と共有したり、自分の考えを振り返ったりする場面において、ICTの活用が有効だと感じていることが分かった。

設問2【この1年間、国語や書写を学んだことで、次のようなことはありましたか?】という子どもの文字学習に対する意識の高まりのアンケートでは、肯定的な回答が3つの項目全てで84%以上という結果となった。特に【文字を書くときに、きれいに書くように気を付けるようになった】の項目では、肯定的な回答が88%という非常に高い結果となった。2か年の研究を積

み重ねることで、子どもたちの文字に対する興味関心の高まりと、きれいに文字を書こうとする意識の変容が見られた。

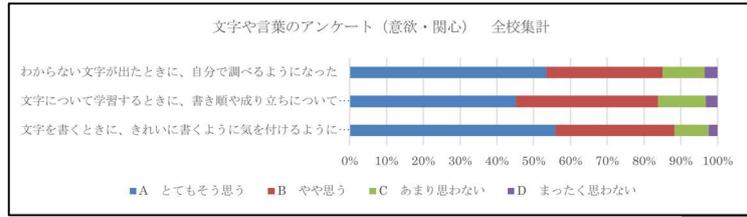


図 6

**(2) 本研究で目指した「思考し自ら課題を解決する文字学習」とは**

2か年の研究を通して、本校で目指した「思考し自ら課題を解決する文字学習」の具体的な姿が見えてきた。それは、「計画した後、遂行または意志の制御をし、自己内省を経て、再び計画に至ることを繰り返す」自己調整学習 (2007, ジーマーマン他) を行っている姿と重なる所が多い。

本研究の文字学習において、「子どもが思考する」とは、文字や言葉と向き合うことで自分の学びとつなげる姿であると捉える。「自ら課題を解決する」とは、自分の学びとのずれや友達の考えの相違点から文字や言葉に対して問いが生まれ、子どもが解決に向かって主体的に理由を考えたり根拠を明確にして説明しようとしたりする姿である。

**(3) NEW ホシオキスタイルへ**

自己調整学習を背景理論として、研究の積み重ねとホシオキスタイルの構築により、国語科における ICT の活用法【共有、協働、振り返り、モデル、考え、動画・静止画】が見えてきた。

授業において ICT は手段であり目的ではない。子どもの実態や発達段階に応じて、いつどの場面で活用するとよいのかをしっかりと考えることが必要である。学習の目標に向かうために、教師や子どもが ICT を取捨選択していくことで、より効果を発揮すると考える。

子どもが思考するためには、考えをもつことが必要不可欠である。仲間と考えを共有し伝え合ったり、互いに評価し合ったりすることで、子どもは考えに自信をもつことができる。仲間とともに協働しながら活動を進めることで、子どもの思いは整理・分類されていき、考えはブラッシュアップされていく。自分の学びを振り返ることで、成長を実感したり、新たな疑問が生まれた

りして、追究の意欲は高まっていく。子どもが必要に応じてモデルを活用することで、自分の根拠を確かなものにしていく。

今後は、教科の枠を超えて「思考し自ら課題を解決する学

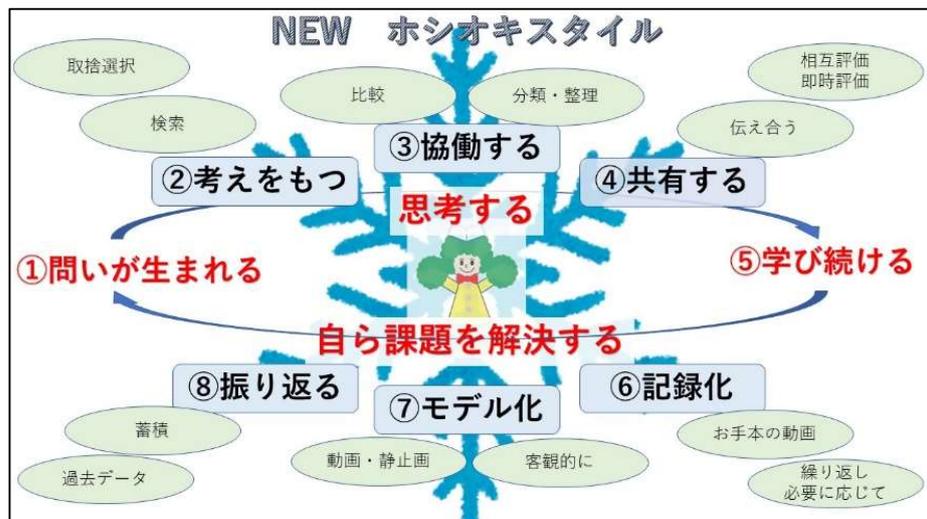


図 7

習」を実践していくために、新たなホシオキスタイルを構築するに至った。

## 6. 今後の課題・展望

ICT活用について課題が見えてきた。

設問1【自分の考えをよく知ることができる】の項目において、「Aとてもそう思う」と回答した割合は、「Bやや思う」と回答した割合よりも低くなっている。子どもは、自分の考えをもつために、タブレット端末の検索を使用して調べることができるようになってきた。しかし、自分の考えを確かなものにするために根拠を明らかにする場面では、膨大な情報を見比べ、必要な情報を取捨選択することはなかなか難しいと考える。「調べてみよう」から「何のために調べているのか」「課題は何か」など、学習において理由をはっきりとさせて解決の見通しをもつことで、子どもが意図をもってICTの活用ができるようにしていくことが大切である。

また、【自分の文字や文例の課題を見付けやすい】の項目では、肯定的な回答が70%を超えている反面、否定的な回答（Cあまり思わない、Dまったく思わない）が約20%と他の項目に比べて高

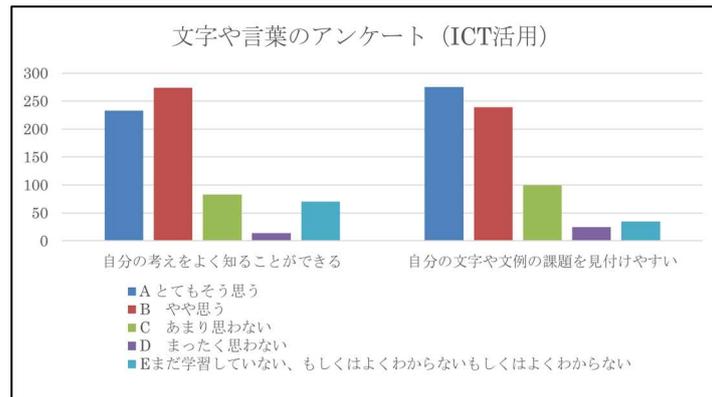


図8

くなっている。子どもが課題をもつためには、「なぜ~だろう？」や「どのように~したらよいのだろうか？」という、**授業の中で子どもが強い問題意識、つまり問いをもつことが非常に重要である**と考える。「問い」を生む（醸成する）ための教師の手だてを思案することで、子どもの知的好奇心を喚起し、子どもが見通しをもって学びを進めていく事ができるはずである。2か年の研究により、子どもたちは当たり前のようにICTを進んで活用できるようになってきた。今後は、ICT活用を土台として、より子どもが意欲をもって学びに向かうことができる授業の創造を目指し、子どもの学びに向かう意欲が継続できるための教師の手だてを検討していきたい。

6年間を通して子どもたちを育てていくことを考えると、本研究は、まだ2か年しか経過していない。さらに研究を積み重ねることで、知識・理解においても少しずつ成果として表れていくことを期待している。

## 7. おわりに

本研究が目指す子どもの姿は、国語科における学力、資質・能力の育成をすることで、子ども自身が「国語の学習がよく分かるから、楽しい。」と感じ、言葉に興味関心を高め、自ら学びを積み重ねていく姿である。2か年の研究により、研究の成果と課題を他の教科・領域へと広げていき、「豊かな心で学び続ける子どもの育成」を目指していきたい。

## 8. 参考文献

・ディル・H・シャンク, バリー・J・ジーマン (2007) 『自己調整学習の実践』北大路書房